

佐藤 憲幸 東北歴史博物館 学芸部 学芸班長／主任研究員

0. はじめに

当館は、昨年度から継続して石巻文化センターの毛利コレクションや文書資料、民俗資料などを中心に数万点を一時保管しているが、それらに加え、今年度は新たな被災資料の受け入れ等も行ってきた。また、一時保管施設としてのみでなく県の拠点博物館として、「宮城県被災文化財等保全連絡会議」（以下 連絡会議）の運営、被災資料の救出、県内一時保管施設の環境調査、被災館にかわっての資料修理、修理支援、被災地支援のための展示や体験教室など様々な活動に取り組んできた。

以下では、連絡会議の一員として実施した被災文化財に関わる保全活動の他、当館の文化財復興活動全般について報告する。

1. 当館の活動について

1-1 被災資料の救出

昨年度、県沿岸部のレスキュー活動の主体は津波による被災資料の救出であった。しかし、震災から1年が経過し、これまで後回しとなっていた地震被害による資料も新たに救出が要請されることとなった。

〔南三陸町 ひころの里展示室〕地震により展示室として使用していた蔵が被災し、展示ケースのガラスが破損するなどして資料にも被害が及んでいた。6月12日に宮城県文化財保護課とともに現地調査を行い、7月11日に職員5名を派遣して資料の搬出作業を行った。救出した資料は掛軸10点、書状1点、地図1点である。

1-2 被災資料の受け入れ・一時保管への対応

昨年度、一時保管した資料については、広い保管場所が必要とされたことから、自動空調が行われていない別棟の浮島収蔵庫で保管しているものも多い。そのため、保存科学担当職員が定期的に巡回して環境管理を行い、さらに梅雨が始まる前の6月から10月にかけては、全学芸職員



調査作成

が当番制を敷き、除湿器の稼働、温湿度のチェックを毎日行った。また、個別資料の状態チェックや調査作成、記録保存等についても保存科学担当職員や専門学芸員が行っており、安定収蔵に努めている。

今年度新たに受け入れた資料については、以下のものがある。

〔石巻市 考古資料〕仙台市教育委員会が洗浄作業を行い、終了した資料の一部を、当館が一時保管している。5月29日に石巻文化センター考古資料100箱、11月21日に石巻市教育委員会稲井収蔵庫考古資料40箱の受け入れを行った。

〔南三陸町 ひころの里展示室資料〕町内に適切な環境の保管施設を見いだせないことから当館で一時保管することとした。資料内容は前述のとおりである。

〔気仙沼市 当世具足（個人所蔵）〕1領を救出後、東京文化財研究所において保存修理がなされたが、これが無事終了し、気仙沼市教育委員会、所蔵者、東京文化財研究所と協議し、所蔵者の意向を踏まえ、当館で一時保管することとした。

〔個人所蔵被災資料〕震災以降、家屋の被災等により所蔵品の寄贈を希望する事案が増加している。当館としては積極的にこれらを受け入れることとし、県内資料の流出・消失を防ぐよう努めている。今年度、寄贈を受けた資料は近現代資料を中心に764点を数える。

1-3 環境調査

地震、津波による被害を受けながらも改修を受け、あるいはそのまま収蔵施設として使用される施設も多い。これらについて保存科学担当職員が中心となり、現地で収蔵環境等の調査を行った。

〔南三陸町 入谷郷土伝承館〕津波被害はなかったが、地震により環境が悪化したおそれがあるとして、宮城県文化財保護課経由で調査の依頼を受け、6月12日に職員3名を派遣して、簡易燻蒸による虫害処置と付着菌調査を行った。

〔岩沼市 下野郷学習館・ふるさと展示室〕下野郷学習館は津波で浸水したものの継続して資料を収蔵している。5月15日に職員3名を派遣して資料及び環境のコンディションチェックを行った。ふるさと展示室については、被災は免れたが最近の建築物であるため、同日、総揮発性有機化合物（TVOC）等の調査を行った。

〔石巻市 旧石巻市立湊第二小学校〕津波被害を受けているが石巻市被災資料の仮設収蔵庫として使用されることとなり、改修工事に先立ち環境調査を行った。東京文化財研究所、筑波大学松井敏也氏の協力のもと、宮城県被災文化財等保全連絡会議の予算を活用し、平成25年2月8・9日に日本無機株式会社に委託して実施したものである。

1-4 被災館に代わっての資料修理及び修理設計等支援

被災したミュージアム資料等に対し、専門的知識を必要とする修理及び燻蒸作業を被災館に代わって実施した。また、宮城県被災文化財等保全連絡会議が行った被災資料修理支援活動においては、考古、民俗、文書、保存科学分野の担当館として、修理設計等支援を行った。

〔修理〕NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークが救出し、その後、石巻市に寄託された石巻市阿部家資料の掛軸等40点と女川町が所蔵する吉田初三郎制作の女川港鳥瞰図1点の修理を行った。特に阿部家資料については、損傷、劣化が著しく、対応が困難であったため、連絡会議及び宮城県教育委員会経由で、文化財保存修復学会に修理設計等のための調査を依頼した。調査は11月8日に当館で実施され、資料の一部15点程を実見し、カビや破損、癒着状態等を調査した。その他の資料については損傷の程度等を勘案して、各々個別の修理方針を当館が検討することとした。その後、11月29日付け文書で文化財保存修復学会から修理設計等に関する調査書が送付され、それに基づき

修理仕様を作成し、業者に委託して修理を行った。なお、開披不能資料もあったが、それらについては開披作業を東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターに委託した。

〔修理支援〕東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館考古資料26点、多賀城市教育委員会文書資料等650点、白石市教育委員会考古資料等17点の修理仕様等を検討し、回答した。

1-5 宮城県被災文化財等保全連絡会議の運営

平成23年10月21日に組織された「宮城県被災文化財等保全連絡会議」で当館は代表幹事兼事務局を務めている。本会議の調整役として、他館との連携を図りながら、資料救出、応急処置、修理支援、環境調査、情報公開（巡回展）等の諸活動にあたった。詳細は宮城県被災文化財等保全連絡会議の活動報告を参照いただきたい。

1-6 被災地支援活動（展示・体験教室）

東日本大震災復興祈念として4月28日から6月17日まで特別展「神々への祈り―神の若がりところの再生―」を開催した他、11月6日には、津波によって壊滅的な被害を受けた南三陸町において、小学生向けの砂金取り体験を実施した。かつて砂金の産地であった郷土の歴史の理解を深め、地域の誇りを再認識してもらう事を意図したものである。これには伊里前小学校と名足小学校の生徒や関係者約50人が参加した。

1-7 活動紹介展示

当館の被災文化財救出・保全・復興活動への取り組みとともに、県内被災文化財の現状に対する理解を深めてもらう事を目的としてパネル展『被災文化財復興への足音』を開催した。内容はレスキュー活動を紹介するパートⅠ、その後の環境調査、修理の様子を紹介するパートⅡに分けた。開催期間及び会場は以下のとおりである。

『被災文化財復興への足音―文化財レスキュー活動の報告―』 (B2パネル18枚)

- ① 4月28日～6月17日（東北歴史博物館）
- ② 10月1日～12日（宮城県庁1階県民ロビー）
- ③ 平成25年1月16日～2月3日（東北歴史博物館）

※パートⅡのプレ展示として、最新情報も交えながら一部パネルの内容を変更して展示。

『被災文化財復興への足音Ⅱ―救出、そして修理への歩み―』 (B2パネル15枚)

- ① 平成25年2月5日～3月3日（東北歴史博物館）

2. おわりに

震災から2年が経過した現在、活動の主体は資料救出から保管資料や環境の管理、そして修理へとシフトした。当館にとっては、常に災害時における県立博物館としての存在意義と周囲に求められる役割を強く意識し、それに応えるべく活動を展開した2年間であった。しかし、県内の文化財復興活動はまだその緒に就いたに過ぎない。資料の安定化処理、修理、所蔵者への返却、ミュージアムの再建等、様々な問題は山積しており、その解決には、これから10年単位の長期間を要することは間違いないであろう。

当館は、今年度策定した事業の中長期目標にも『震災対応』を重点施策の一つとし、「県立博物館として、県内の文化財レスキュー活動をリードし、その推進に努めます。」と明記した。被災県の拠点博物館として、その期待と役割を十分に果たすべく、覚悟をもって、真摯に今後の文化財復興活動に取り組んでいきたいと考えている。